◆歌舞伎の魅力シリーズ◆

義経千本桜に観る

立廻りの美

◇規格
16ミリ・カラー・34分
◇販売価格（消費税別）
16ミリ/240,000円

上・右/伏見稲荷鳥居前の場

◇すいせんの言葉

早稲田大学名誉教授
日本芸術文化振興会理事 **郡司正勝**

先に「歌舞伎の立廻り」という作品ができていますが、このたびは、「立廻りの美」と題して、「義経千本桜」一本に絞って、いろいろな立廻りが、ひとつの作品のなかに、どう散りばめられているのか、その美を探ってゆきます。

稽古場を挿入して、それが舞台でどういう美を発現させるのか、またスローテンポのテクニックを使って、立廻りの動きを精細に捕らえなおしているなど、よりその立廻りの本質に踏み込んでゆきます。

主役の化身事としての忠信の狐振りの荒事、若衆方の小金吾の新工夫の立廻り、大物浦における知盛の大立て、「四の切」の悪僧の「化かされ」という滑稽な立廻りなど、その種類と違いを、それぞれに比較研究して鑑賞ができるように工夫されており、改めて、歌舞伎の立廻りの美に迫って、すぐれた作品になっております。

◇企画・監修
日本芸術文化振興会
国立劇場

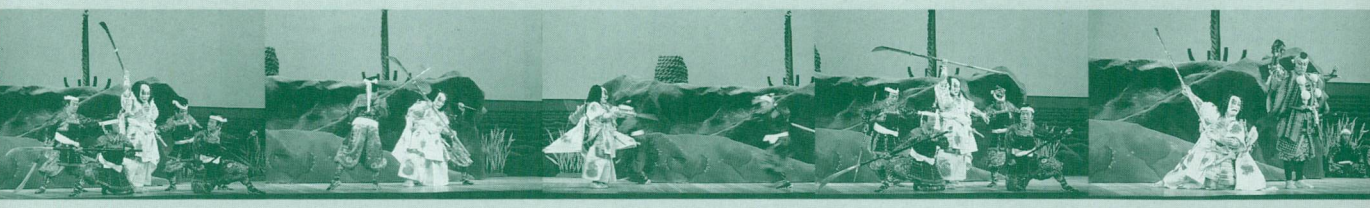
◇製作
㈱桜映画社

◇演目
義経千本桜
伏見稲荷鳥居前の場
大物浦の場
小金吾討死の場
河連法眼館の場

◇主な出演者（五十音順）
市川團十郎
市川團蔵
尾上菊五郎
尾上菊十郎
尾上辰之助
尾上松助
中村雀右衛門
中村富十郎
中村福助
中村松江
坂東八十助

◉配給

「義経千本桜」の主な立廻りの見どころ
鳥居前■敵に襲われる静御前、そこへ佐藤忠信が現れる。忠信と、槍を手にした大勢の軍兵との華麗な立廻りが繰り広げられる。



大物浦■義経との戦に敗れた平知盛は、最期の力をふり絞り、敵の軍兵を追い散らす。血染めの白装束に大薙刀をふるって立廻る知盛の姿は、壮烈である。（蟹の見得）

河連法眼館■初音の鼓を賜わった礼に、敵の悪僧を妖術で引き寄せ「忍び掛かるを見事に返す」、狐忠信の化かされの立廻り。悪僧のしぐさや扮装が滑稽である。

小金吾討死■主君の妻子を落ちのびさせ、敵の追手に取り囲まれた小金吾は、壮絶な討ち死にをとげる。どんたっぽの囃子（はやし）とツケ音に合わせ、捕手の黒四天が小金吾にからんで立廻り、時には見事なトンボを切って見せる。縄と竹藪を使った道具立ても見どころである。

◇解説

「タテ」とも呼ばれる歌舞伎の立廻りは、血生臭い闘争の場面を、とんぼや見得などを織り込んでおおどかに美しく展開する、一つの見せ場になっている。その華麗な演技によって、主役の華々しさが一層引き立てられるのである。

映画では、義太夫狂言の三大名作の一つ、「義経千本桜」を取り上げる。

この舞台稽古の様子を見てみよう。立廻りの稽古は、タテ師を中心に進められる。公演台本には「立廻りよろしく有りて」とのみ記されているが、数多くの立廻りの型を使いこなし、長丁場の立廻りの演出構成を工夫するのが、タテ師の腕の見せ所である。今回、タテ師の尾上菊十郎さんは、新たな演技を取り入れようと試みている。

歌舞伎の立廻りは、長年、多くの役者たちによって、様々な苦心と工夫が凝らされてきた。その努力の集積が、今日見られるような華麗な舞台を創りあげたのである。

さらに、下座音楽の演奏とあわせた立廻りの稽古を行う総ざらい、そして公演直前の舞台では、タテ師と舞台美術、大道具の担当者による念入りな道具調べと、準備が進んでいく。

こうして、通し狂言「義経千本桜」の舞台が創りあげられる。この中から、「大物浦の場」「小金吾討死の場」など、見どころとなる立廻りの場面を中心に、じっくりと鑑賞していく。

[下座音楽とツケ音]

舞台下手（左）の黒簾の裏では、役者の動きに合わせて大小の太鼓、三味線などが演奏される（下座音楽）。上手（右）で打つツケの音と調和して、立廻りの場面に緊迫感・リズム感のある効果音を作り出している。

上/大物浦の場（碇知盛）

[製作スタッフ]

製作＝村山和雄
脚本・演出＝原村政樹
撮影＝江連高元
村山和雄
山屋恵司　他
照明＝本橋俊男
録音＝堀内戦治
編集＝吉田栄子
加納宗子
解説＝小川真司
現像＝ソニーPCL

◉製作——株式会社桜映画社 〒151 東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル
TEL 03(3320)6311㈹ FAX 03(3320)7666